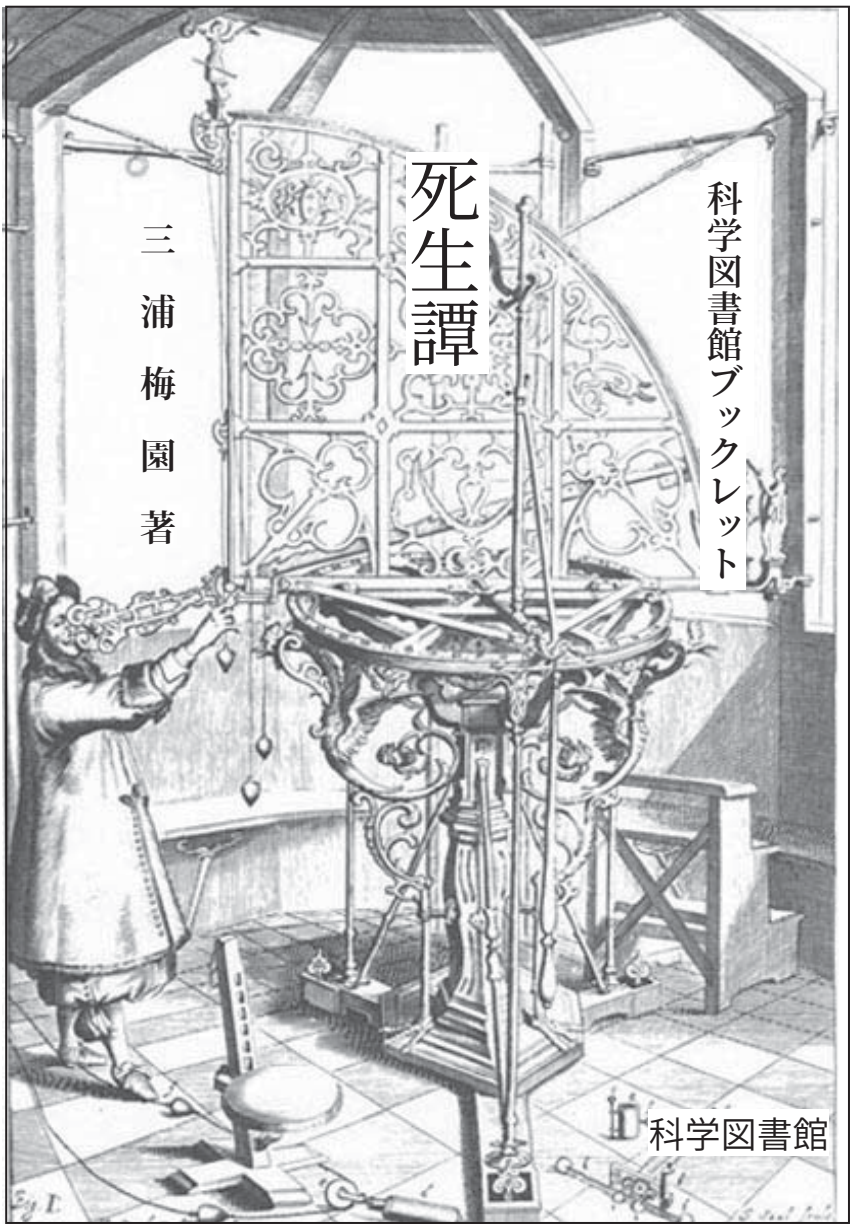


科学図書館ブックレット

死生譚

三浦梅園著



科学図書館

Eg. I.

死
生
譚

三浦梅園

| | | |
|----|-------|----|
| 葬 | | 二五 |
| 幽靈 | | 三 |
| 殉死 | | 二 |
| 死後 | | 〇 |
| 就死 | | 一九 |
| 再生 | | 一七 |
| 蘇生 | | 一五 |
| 殺活 | | 一四 |
| 長生 | | 一一 |
| 求嗣 | | 一〇 |
| 死生 | | 七 |
| 生化 | | 三 |
| 緒言 | | 三 |

目次

晋ひそかに自ら井に坐して天をかたり蠡をもて海をはかる謗をはからず玄語数万言を著して天人の故をつくさんとす贅語数万言猶縷々として事物を包羅しつくさんとす十数回草をかへて稿を脱するを得ず今年丁丑の夏一客偶来て話死生の故に及ぶ事既に玄草中にありといへども国字数篇となし竹間暑を消すの具となして又問遊の人に示す

生化

物にあれば生化といひ人にあれば死生といふ物と我とおなじく天地の間にありて生化すれば其名同じからずと雖其事は一也このゆへに死生をしらんとならば生化の故をしるべし生化は泛くいふの言葉にして死生は專にいふの言也天地の間に生化せぬものなし源泉を発して夜となく昼となく流れて絶ざるものは生々也海一日川の流をうけて長に盈ざる物は化々也生とは出来て物をなし化とはきえ失せて形を失ふ也一盞の燈その光宛然としていつもかわらずみゆれどももと下に油ありて生々するものをつく事ありもゆる火は絶ゆるひまなく外にむかひて消えゆくなりきゆれども生じ生ずれども消ゆる時は其かたち大ならず小ならず常住の形をなす天地の間もし生ずるのみにて化せずば一盞の燈も天にみつべし化するのみにて生せずば大海の水も涸渴すべし化すれば生じ生ずれば化す是を一氣の通と云ふその

ゆへいかにとなればその燈の上にしばらく空器を覆ひて其氣もれて化せざれば下につぐべき油はあれど化する氣に乏しき故無手消する也其理はなほ油つき心つきて其の氣たえて化するに殊なることなししかれば天地と雖生々化々間断なく日月上に繋りて常恒不変の象あれども河海の常恒にして実は生々化々のやむことなきが如しもし天地生化にあらずと云はば昔の天地は新らしく今の天地は故からん天地に新故なきものは生化一氣の通ずる所にして水火のかたちに異ならず近くこれを身にとりて譬ふるに氣集れば形むすび氣散ずれば形化すその形むすびて未とけざるの間も出る息をもて化し入る息をもて生ず筋骨皮膚爪髪此氣を以て榮枯をなす草木を挙て是を云ふときは鳶の生を木末によせ蛆の形を肉中になすがごときその種あるにはあらねども氣の氤氳する所は物をなすこれを氣化と云ふ動物は雌雄あつて子をなし植物は華穀あつて苗をなす形の感ずる処に物をなすこれを形化と云ふ化の字に二義あり生化の化は生に対していへばきえうせる也化生の化は変化してなる故に生の意をかねて云ふ氣化形化と云の類是なりさればその形化といへるも相感ずる所の微を尋ればこれ氣化也其故いかにとなれば草木の種子をとりてこれを地にうふるに此種のうち枝葉花実あるにあらず含めるものは一団の生氣なりその生氣水土糞壤雨露燠寒の氣相和して芽を生じ枝をわかち葉をしき花をひらく木のうちに花実なく子のうちに枝葉あらず時節いたつて其形をなすこと忽然たるがごとしさらば此ものをもて水土よりなれるとせんか雨露よりなれるとせんか種子よりなれるとせんかいづれとも定まりがたくいづれをも捨てたし一

元氣跡を陰陽にわかち位を天地にさだめ形氣陰陽交錯氤氳として水土雨露草木人物をなす一元氣よりこれをみれば水土雨露草木人物一用にして他物にあらざるがごとし水は水の形にして水を有し土は土の形にして土の氣を有すこれを各形各氣といふその各各なるものをかねて有するものを一元氣といふたとへば目の質はみる氣を有し耳の質はきく氣を有し口は味氣を有し鼻はかぐ氣を有するこれ一身の各形各氣にして耳目鼻口の各形氣は我一元氣のかね有する所なるが如しこれをもて耳より入るもの口より出で目より入るもの手にてなすもし唯耳は耳にして目は目ならばいかで一身の用をなすべき各各のものありといへども一元氣のためには同一用也このゆへに水は火を生じ火を消し火は水を生じ水を消すみな天地の一用をなす種子の巧にもあらず水土の巧にもあらず雨露の巧にもあらず種子は水土の氣に託し水土は雨露に相和して枝葉花実をなすこと是を一元氣の用といふもと万物は氣より生ずるものにして水火の氣形をかりて生ずる故に氣物なり天は形なし地は形あり地の体は土也天の体は空也この故に土の一種はきえずその余はみな氣にかへるなり水はとけて水にかへる土塊は碎けて土となるしからば氣よりなるもののみいかでかひとり氣にかへらざらん草木の種実はその根幹の氣より結び苗の枝葉は種子の氣より生ずる胚胎は其精液の氣より結びその骨肉は胚胎の氣より□□□水は水と結びても泡とつけても同じ水也土は塊となりても埃となりても同じ土也形を結ぶときは暫く人となり物となれども解れば同じ氣なり或はとけ或は結ぶは一氣の用なれども結ぶが為に氣生せず解るがために死□□□各形につ

く所の気形に従て化す目のみる気耳のみる気鼻のかく気口の味ふ気胃臆の思慮の気手足の
 動作の気これ化する所の者也猶火の暖気水の寒気の火に従ひておこり火に従つて消え氷る
 に従ひてきびしく解くるに従ひて散つるが如しその水となり火となる所の気は水火の為め
 に生化せず其故は玉もちて火をとるに陰気の影きびしく逼れば陽氣中に聚りて火を起し
 餅を煥め柔ぐるに陽氣せまりて内湿ふ此火と水と一氣を種として生ずされば火に水をそそ
 げば又もとの一氣となる水を火ににれば又もとの一氣となる先儒これを觀て一元氣死なず
 と云ふ仏子これを見て不生不滅といふ世俗に云人死して魂は冥溟の間に遊び形は土とな
 とその魂とは智覚思慮の氣にして或はよろこび或はかなしみ或は愛し或はにくむ所の心也
 これは胃臆の形に従つて消ゆるもの也その形とは氣にかへるものにして土となるべきもの
 なしされば古塚に土なしとかやそれ万物の形たる水火にあらざるものなしそれ五行家の説
 に火生土といひて火物を焼ば土となると云ふ是みる所の麓なるなりたとへば大木をきりて
 是を炉中にたくに其ひかりとか烟とか熱とかに○^マ○^マわづかにその查滓の残れるもの数車の
 薪もわづかに一炉の灰となるそれも終には風に化し雨にきえて跡かたもなくなりゆく也人
 も天地の間の生化の一物なれば終には皮肉は早く化し歯骨はおそくくちていつしかもとの
 烏有となるなりもしまた生ずる者の化して土とかとならばおちば山を高くし鱗海をしづめ
 日をなで月を攀んも覺束なしよつて万物生化の故を知る時は我死生の故を知る也

死生

天地のあいだ唯かたちあるものと形なきものとのふたつのみ形なきものは目に遮らず手にとられずよつて虚ともいひ無ともいへども是氣にして空廻なし此氣あつまれば形をなし散ずれば形をとくむすぶるものは氣の魂なりとくるものは氣の融なり唯氣物にふるること同じからざればその形を結ぶもおなじからずたとへば地は發生の氣をふくむ故にそのあふ所をゑらまず草なれば草を發生し木なれば木を發生するがごとし又ここに一株にして両枝の木あらんに左の枝をきる時は右の枝いよいよ栄ふ又ここに一本の草あらんに葉をつめば根にみつ左に行されば右にさかえ葉に行かざれば根にみついづくへもひとつ生々の氣たゞふるる所にしたがひ託する所によりて同じからず是を一氣の通といふ氣機の微うかがひたしといへども其通はみつべしたとへば一溪の魚川をかたむけて漁れば生ずるもの多く漁らざれども益ざるものはこの氣生化する所にして通ずることあるにあらずや又米麦の類これ在地に播けば苗となりおさむる時はとなとなるこれ機のふるる所に通ずるにあらずや此ゆゑに機のふるるに随ひその物ことなりといへども一氣の氤氳する所ことなることなしこれをもて此氣天にあれば転り地にあればたもち時にあれば往来し物にあれば生化すこれによりて形に有無あり生ずとは形のなきよりあるに始まるなり化とは形のあるよりなきに終るなり唯氣とは元來形あるにあらず聚りても氣なり散じても氣なり然ども其氣に幽明の跡あり

て同じからず明とは形なしといへども其跡のあるなり幽とは形もなく跡もなきなりあととはさむきにかたちはなけれども寒ければ寒きの跡ありあつきにかたちなけれどもあつければあつきの跡あるが如し目み耳きき肢体うごき心にはさまざまの喜怒愛憎迷悟利鈍跡をなす所あれば是を明といふされば形あれば氣明なり形なければ氣幽なり幽なりとは氣なしといふにあらず形と跡とのなきなり氣あつまりて物を生ずれば物結びて又その氣を生ず水のひややかに火のあつきより蘭かふわしく蓼きく鳥啄人をころし參著人をおぎなふも各その氣の跡あるなり目はみる氣を具し耳はきく氣を具し口はいふ氣を具し肢体の手足は動作の氣を具す胃臆の具する処これを心と云ふ耳目肢体の形なれば視聽言動の氣なきこと能はず目肢体の形解れば視聽言動のことこと能はず猶ひかりの燈にしたがつて消ゆるがことし胃臆に心ある事耳目に視聽あるがごとし来るには去あつて偶し明なるには暗あつて偶し上には下あつて偶し有には無あつて偶するをすれば天地の数は二つ□出し偶するものは反対をなす去とは来るに反するもの也暗とは明に反する者也下とは上に反するものなりしかれば死とは生にあらず幽とは萌にあらざるものなり生の時の心をもて死後のことをはかり生の時のことをもて死後のことをいとなむそれ心は胃臆に有するの氣にして人の一氣の精華一身の主となるものなりよつて痛痒あればさと利害あればしり是非あればわかち事あればおもひ物あれば察すその甚聰明神靈なる者は一氣の精華なればなりしかれども死は生に反し心は氣の精華なることをしらず生をもて死をみる死しても心に喜怒愛憎あり体に苦樂勞

逸あり且又よく視聽するとならば是生といふものにして死と云ふものにあらず暗とは明の対にして明なると反するものなり明なることをもて暗ことをおしはからばついに暖をしること能はざるべしくらきをはかりしらんとならば明なることをすて明なるとたがふものをおもふべし暗がりを探ねんとて燈をかゝげて爰や暗なるかしこやくらきとよもすがら尋ねたりとも終に暗き処には得ゆかし手にもてる燈をけしなば直にそのところやみとなるべしひたすらにいまのいとなみをもて死後の事をおもふ事燭をとりて暗を尋ぬるがごとし寒は暑にことなるもの末は本にことなるものひとり死のみ生とおなじといふたとひその言を大しにてこれを天地の外といふともあに此理あらんや目の明耳の總口体の言動をすて胸臆のおもひをすては死後これ一氣即生前の一氣なることをしるべし若し燭をかゝげて暗をたづね瓜をくひて苦きを察するがごとし智者といへどもいかでか其解を得んある時客ありて予に死後のことをとふ予これをさとて易に原反終之故知幽之故といへる是なりけふの昼にしてこよひのことをしらんとならばゆふべのことをおもふべし死後は生前のごとし生前のことをすれば死後はなりといひければ客言下に發明しされりむかし子路死を孔子にとふ孔子こたへて未知生焉知死とのたまへり是孔子の子路を□□へたまふにあらずよく生をしれば死をしる生をしらざる故に死をしらざるなりこの故に死後の天堂地獄は妄誕なりこのゆへに唐のそれ□□天堂なくばやんなん云々まどへる人の為にいへば可なり君といへども実見なきのことば也しかるをその妄誕にまどひて忠にもあらず義にもあらず死後の榮利を

いとなむとて火に入り水におぼれ食をたて澗に投じ身命をすつること愚なるの至とは云ながらそのみなもとを尋れば悉達太子その責をまぬかれず

求嗣

求嗣の術あり咒を誦し禳をなし服餌にもとめ鬼神にいのるしかれども物の生ずるや氣に感応して胎をなす感応は一氣の用にして感応の道ふたつあるにあらざ感とは応の先ずる者なり応とは感の出ずるものなり草木の地にある時に下に發生を感ずれども餘寒上にとち春令上に応ぜざれば芽をぬきんずること能はずうゑに春暖の応あつて發生を催せども地中の種子いたみかじて感ぜざれば生ずることあたわず唯感応相得て芽甲ひらけ芽出で葉でき花ひらく鳥の卵をむすもさのごとく卵の中に一盃の生意みちて感ずれども牝鳥抱伏の応なければ孚ず牝鳥よくいだくといへども中の生意やんで感ぜざれば□□□□□□□□人もさのごとく氣血さかんかといへども感応二つながら相得ざれば胎育をなさず況や虚弱の稟受をや偶巫をめし神に賽□する時にいたりてはじめる事あれば是を祈祷の巧とおもひもしいひもすれども是偶然といふものなり事に偶然的然あり然とは揚由基が弓いるごとく百歩を退て揚の葉をうがつに百度はなちて百たびあつ千たびはなちて千度あつこれを的然と云ふ偶然とは拙工の弓いるがごとし百歩を退て揚の葉をうがつに又幸にして矢ごろをあやまたず其矢たとひあたりたりともつくべきわざなき時は是偶然なりもし求嗣の法あつて百発百

中すること揚由基が射のごとくならば其術ありとせんもし中るもの半中らざるもの中ならば姓娘と祈祷と相会するの偶然にして術者の巧にあらざ感応のなす処むかしは孔子を尼丘山にいのりて得たりしとかや孔子は聖人なり孔子の父は聖人にあらざ祈りしこともさもあるべしいのりたる故に生れたまふと思はゞ誤るべしその外太白夢に入て李白むまれ日輪懷に入て秀吉生るゝの類みな英雄の徒其氣甚ださかなれば吉夢をみたることはあるべし謫仙星にあらず秀吉また日にあらず米子の日子の有と無とは天命なり此詞まことに是なり感嗣のなきを歎き妄りに鬼神を流さんは愚なることなり孟子のいわゆる求むべからざる者なり

長生

人は稟受ことなれば賦命も亦同じからず賦命といへばとて天に有司ありてそれはいくつと限あるにはあらねどその稟受によりて長短ひとしからず況や月寒暑湿外をせめ喜怒哀□内をやぶり飲色食肉にもとめ刑禍上にかゝるをや稟受とはたとへば一盞のともし火のごとし盞に大小あり油に多少あり心に長短あり盞大に油多く心長きは長寿の稟なり或盞大なれども油少く或油みてれども盞小く或は油盞備れども心みじかきは天受の短かき所なり天にあるものは人の力の及所にあらず世に身を愛養せずして長寿久しきあり保護をつとめ短命の人あるはこのゆへなり油つき心つくるは火の命のつくる処なりよく稟受の命を奉じて化に帰するは長短ともに命に帰す左あつて右なきものなし端ありて中なきものなし世豈始あつ

て終なくむまれて死ざるものあらんやむかし秦始皇漢武帝強を制し堅を挫き天下を掌のう
 ちに運し驕きわめざるることなく欲とげざることなしひとり死の事心に任さず時に迂怪妄誕
 方士等海外に仙山あつて不死の薬を生ずと云尚多怪の説をまふけ其生をたぶらかす二帝つ
 いに心を動し天下の財をかたぶけ或は舟船をよそほひ樓客をおこし長生不死を願れしかど
 も唯徐福少翁等の利をなめ始皇は沙丘に崩じ漢武帝は□□に崩ず我きく仙術尤情慾を禁ず
 と人かぎりある身をもちて究なき欲にしたがふ時精血のみなもの下にかれ無根の火上にう
 ごいて少壯忽老衰の相をあらわすこのゆへに色を伐性の□□□□酒は慄悍にして氣血を走
 して肉は重濁にして湿をうごかす况や美味は飽ざればやまずついに脾胃をして其任にたえ
 ず終に腸胃をやぶるよつてこれを腸をくさらすのもといと云内色食をつゝしむ外禍根をさ
 くれば各その天命をたもつかくしつも短命なるは本より賦命のみじかき也孔子の伯牛の病
 をとふらひて是を命とのたまひしかれば部子が三十の寿も短命とは云ふべし非命とは謂べ
 からずしかるを兒女の輩稟受の虚弱を問はずして長短を以て□□□□このゆへに養生は長
 寿をたもち以て大なりとす長生不死とは妄誕なり欲を縦にして死をおそれ手をいかんとし
 て服食をこのみ幸をゑんとして神をけがすひとり萩菖蒲茯苓の寿をのぶると云ふは唯その
 巧をほむるの辞にして□□其事はなしこれみな油あり心あれどもこれを風前におくが如し
 或風にふかれ飛蟻にけされても消ゆべき時節なりといふは命をしらざる人の言也このゆへ
 に賦命をたもつは養生の故なり養生とはあながちに針灸服餌の法にあらず夫田野の人は体

しばらくも逸せずして心は学に逸す飲食味をつくさざれば飽食の愁なしこの故冬は風意の内に入り夏は暑□の内に住るといへども多くは其氣おかさねず長命病すくなし貴人は常に毒薬を察し寒暑に□すれどもいろいろの病をたくわへて長命すくなし酒にふけりては長夜の飲をなし□にめでゝは花月に心を悩し心を勞して心肝を刻し危に居ては骨肉をやぶりは等を天命をちゝむるとはいふなりそれ養生におくれたるに鞭つと云ふ事あり後たるにむちうつとは羊を牧するに後れたるにはむちうちさきに及しむるなり魯の単豹窟居水飲して其内を養ひしかども外のまもりをわすれて虎のためにくうわし張毅は門を高く薄をかけて外の衛をなせしかども内を養ふことをしらず内熱の病を發して死せりこれみな後れたるものために身を亡せりこの故に孟子も命をしるものは嚴牆のもとにたゝずといへども身は父母の遺体なりつゝしまずんばあるべからずかの義に臨みて命をすて危をみて命をささずくることがときは義外に命なければ私の為に身を破るとは同日の事にあらず浅しくのがれかくれて命いきたりとも天にすてられ人にすてられ天地の間にたつとはいひがたかるべし我天命をあなどり身をそなひて災にあひ危急にのぞみ俄に此事の出来る様に心得驚きさわぎ神にいのり仏にたのみしるしなければ天をうらむうらめりとてそれ何の益あらん火に心をまじしばしばかかげて明を一時に快し外風の災をふせがす火のきゆるに臨みてかたわらの人をうらむとも誰か其責にあたるべきまことに賦命のある□□しらずして長生をこひ願ふも非なりわが寿をたもたず天命を戕賊するも非なり

殺活

死なんとするものをすくふを活と云生べきものをそなふを殺と云ふ是死生の我にあるものなりそれ人の君たるもの民をして常の産あらしめ夫にあまんの粟あり女にあまんの布あらしむれば民に凍食のことなからん然して孝悌廉恥をもつて是をひきゆれば下分をしり道を尊みて刑辟をおかすものなし下うえずこゝゑず刑辟をかかされば各天寿をたもつ是活の大なるものなり民をしてつねの産なく男は耕にうゑ女はをるにこゝえしむれば孝悌廉恥をもて教ふといへどもしたがわず凍食してしなざれば刑辟におちいるその非をなすもの本心に出るにあらず已ことをゑざれば也その已ことをゑざるに出るものをかりて是をころせばころすもの多しておかすもの愈多しこれ殺の大なるものなり殺は美事にあらずといへどもこれまたなくんばあるべからず死をすくふを活と云ふされば穀をそだつるには莠をかる蜜を養ふものは蜂をころす蚤虱蚊蠅は膚を害し猪鹿雉兔は苗稼を害す虎狼は人を害す害あつてかれを殺さざればわれこれが為に害せられんとすころす所あればいかす所ありこれ殺活の道なり一齒むしくふ事あれば衆齒を安ぜざる故にその齒をぬいて衆齒をやすんずされば敵と陣を対するがごとき敵をいとふとき味方を亡す宋襄公桀の義をまもりて我兵をやぶる世あに我に忠あるものを殺してよしとするの道あらんとするや東坡かへつてこれを王の師と云ふは何ぞや孔子仁をきくこと我猶人とのたまへり両陣各相のぞみしのぎをけづるに

あたりては敵の害をいとはず身方のきづつかざることをもとむ仁者の心なり悪にしてころさざれば衆を安んづること能はず唯かの仁柔になるゝの徒害をのぞくの道を知らずたとへば蛔虫を養ひ得て一身を亡すがごとし因果の説愚にして暴をなすの心をしずむるに似たりと雖又愚にして柔なるものゝ禍をかもす

蘇生

世に蘇生と云ふ事あり或は病甚しき時氣已に□し体猶ひへず或は時をうつし或は日をうつしいき出で魂復しさて其間のことをかたるに或は天堂にいたり或は閻羅の庁にいたり或は叫喚無間の有様をつぶさに見ることごとく挙るにいとまあらず是仏を信ずる人のみ此事あるにあらず昔晋の趙管子やんで人をしらざる事七日天帝の所にゆき百神と釣天にあそび広樂を聞くといへりそれ心は人の一氣の精華にしてやめばみだれ復すれば正し夜は漠然としてひそまり昼は粲然としてひらく然して心はつく所にそみふるゝ所に動きて心は一心の主宰として視聽言動の氣を指揮してつかふ者なり主宰もし視聽言動の氣の為にみだらるる時妄動妄見す或は平日の念をそゞぐ処にいで或は不意不測のことをなす生涯の念をそゞがんにいかでか彷彿の夢なからん夢に見るものをもて是を實事の証となさば或は身をちゞみて穴に入り足を挙て空をしのがんも其証となすべし也予がしれる所の僧かつてかたりし自過去の事をしらんと欲して仏前にいのること七日仏是につぐ汝前生は牛なりもし疑はゞ

自汝の鼻をさぐるべし鼻べりの穴あらんと覺て鼻をさぐるに果して孔あり小よりを貫すべし又僧かつかたりかつ言ふなり前生牛なり何の因縁あつて今人身をうけたると仏前にいのる時に其身一大地の比丘にして諸人は尊む事いふべらず然して自ほこるの心ある事を覺ゆ覺てよつておもふ其さき比丘驕心あるを以て牛となれり猶僧となれるの徳を以て今又僧となれりと是一念を輪廻のうゑにそゝひてもとめてやまず一身のあな自しらざるがごとしといへども氣血のめぐる処神暗にこれをしる疑念空竅と相会して夢をなすこと牛也牛にして猶うたがふ故に又比丘也比丘にして猶うたがはゞ豈又夢のみるべきなからんや疑念輪廻の夢をなすものにして輪廻前生の夢をなすにあらざると云ふ生の事のやむ也神識のつくる也かの死して蘇るものは氣血猶あつて神識未散ぜざれば⁺寐と同じきのみしかれば吾[□]往て天堂地獄にあそぶにあらざ念天堂地獄をなすもの也又氣[□]の間の事をとふに世のつねの事をみるものもあり偶天堂地獄の事にわたれば人手をうつて其証となす[□][□]子が閑筆記にのす有馬山清涼院僧石文なるもの死して十九日にして蘇る人冥途の事を問石文の曰只湖山の間にあつて風景の好に對するのみ因てこれをおもふに我むかし庐山に上り湖水を見大に心目を悦すそのゝち敢て忘す時に往復て見んと欲す冥途にみる所是かといへりこれまことに禪人の語也これを筮窟の曰[□]芦を夢に比すればその胸中の雲泥おもひやらる蘇とは氣[□]の復するにして死者の再たびたつてはなし

晋の羊祜五歳の時乳母をして弄ぶところの金環をとり来しむかれもとより金環なかりければ乳母いぶかりけるを示自隣家李氏なるものゝ東垣にいたり桑の木の中より一つの金環をさぐり得てかへりけり主人驚きて是わが亡児の失ふ所のものなりと云ければ乳母具にその内をかたりて世に李氏は羊示の前身といひしとかや此時仏教いまだ盛ならずといへども已に此説あり仏教已にさかんなりしより其譚かぞふるにいとまあらずそれ一氣は生化をなす所の氣にして一氣には死生なし死するにあらず生ずるにあらず取れどもつきず取ざれどもまさざるものは一氣の氣むすびて生るれども一氣に氣散して解れども一氣なりたとへば大海の水をくみてそのまゝ海にかへし又此海をくむに此水さきにくめる水なりといはゞいつわりさきの水にあらずといはゞしゆるなりされば生化は一氣の通ずる所なれば生々の氣みつれば自生ず鄙しき諺に見うまれて其まゝ死するものは足のうらよりかへるとて程なくはらめる者多し又その子よくそだつ時は多くはしばらくを隔つることあり是を先の子のかへるといはゞ又くむ水さきのひさごの内の水なりと云がごとしこれ別に相むすぶといはゞ今くむ水さきの水と異なりと云がごとし□然たる一氣秋毫もみたざる所なし聚るものは聚氣なり散ずるものは散氣なり生ずるものは生氣なり化するものは化氣なり其の児のよくそだつ時母のくらふ穀を分て乳飲し母の自保の所の氣をかりて自長すれば生々の氣にとほしき

によりて息することすくなくくらふ所の穀分たづして身を養ひ自たもつ所の氣わかたずして己を養ふ時は生々の氣みちやすふして胎をなすことも亦やすしたとへば木のはじめて生ずる時幹カクをきれば横ヒはへさかんに幹ある時は横はへ壮ならざるがごとし是かのもてる所の氣かへりてひこはへとなるにあらざり又幹を長ずる所の氣と別なるものあるにあらざり只生々の氣あるものは自発せざればやまざる故なり偶氣凝て融せず神識さんずるに及はず又胎をかることも千万中のあるまじきにもあらざれども決して通例のことにあらず千万中の一つなるものをあげて千万の通例となすは陸機が犬千里の信をつたえつれば犬は書信をなすべし曹操烏喙を食て死ざれば烏喙は人の毒にあらずと云がごとしこれをナ驗と云てそのことありといへども智者は証とせざることあり碁子の奩にある時唯碁子にして勝負死活の事あるにあらず唯盤上相囲にいたつて勝負死活正奇窮達をなす又奩にいる時は勝負死活もなしもと石なり最前の城征今の□活にもあらず最前の活をもち来て今の死となるにもあらずまことに生化は一氣の通ずる処是より彼にゆくべしたとへば糞壤培ふ時は苗さかんにして枝葉茂し膏梁をくらふ時は人こへて毛髮うるはしかれば糞壤の形は消て枝葉の形にゆき膏梁の形は消えて皮肉の形にゆく事一氣の通なることをみつべししかりとて糞壤は枝葉にあらず膏梁は皮肉にあらず楠正成湊川にて腹きりていきかわり死かわり尊氏に仇せんと云しは正成の言とも覚えぬ筆者憤をもうすの言なるべし守屋化して啄木禽となり菅公薨じて雷となるか如き一は守屋はにくむより附人し一は菅家を憤るより杜撰是肉の化して蛆となり

□槽のもぬけて蟬となるに似て同じからざる者なり肇法師が本にあらざれば以跡をたる、事なく迹にあらざれば以て本を顕すことなし是に本づきて西天の仏を本地としわが中□国の神を垂跡にしこれを水と月とに譬ふるも前生後身と一術なりたとひ因果転展是を再生と呼といふともその形むかしの形にあらざその心むかしの心にあらざ其神識むかしの神識にあらざれば宿と云ふものは何者ぞやもと一気をもていふとならば再生不再生の言を煩すにたらずある僧一人の獵人を度して汝殺生する事なりき仏といへども木槍の果をさくること能はず況や汝凡天宿縁償ざるべけんや汝今物のいのらをたつといふとも来世の報応いかでかまぬがれんといひければかりうどき、て来世今のわが身を覚□やらんと問ければ否とことたへけるかりうどわれ今の事をしらずば我あづかることにあらずと答ける此者心得ていひけるにや放佚にてやありけんしらねども其詞理致あり無益にして物のいのちをたつは仁人にあらず害あつて物をたすくるは智者のことにあらず是君子の道輪回のごとく相あづかるにあらず

就死

君子通にしたがひて行ふ死して然してやむ君子死にいたる迄□んとしておこたらず曾子病あつし曾子の□□□□樂正子春曾子の子曹元曾申等病に侍しけるに燭をとる童子隅に居て燭を執せしが曾子の簣華て睨なり斯季孫の賜なり元にたつてかへよと云ければその病革也

□なるをうれゑあしたをまちて易んと請ける曾子汝は我を愛すること童子にしかず吾正を得てたをれんこれのみとてすなわち扶けあげて易けるに席にかへりて未安まれず□□□に没しける生は父母の遺体にして上に父母下に妻子皆我に養をまつものなればいづれにとりても苟しくもしがたき者なりしかれども義正にいくべからざる時は生をすて、死をとるとこれ死のつねの習也生としいけるものいづれか生をおしみ死をかなしまざらん臨終の事をもて一生の善悪をこゝろむるが如きは□也君子の人にして病おもきもの其症により苦痛するものあり小人にして何事なく終をとる人あり是は其人の亶受と病の厚蒲とにあるのみ大凡うき世の事をかんがふるに兎孫に無益の遺言などしたる欲あとの害となる事多しさり迎よき事をのこさゞるも不善なりよくよくつゝしむべき事なり

死後

死後の天堂地獄あつて善をなすものは仏果を得悪をなすものは地獄にゆくとは愚夫愚婦のほしいまゝなるを制せんために賞罰も幽冥の中にあげてまのあたりなる鬭争□□□に誅罰等を死後になして非をなすの心を沮め善をなすの道をひらく仏の方便なり胡越さかひをへだつといへども人の識見遠からざれば見解のあやまる所も亦遠からずされば天竺にては死後に閻羅十王あつて賞罰をたゞすといふ□□思ふにこれ悉達太子の説より始れるにあらず古伝の説なるべしものこしの□□もおなじきにや詩にも文王陟降在帝左右といへる其名は

仏と云帝といひおなじからねども死後の□□をとく事は遠からずその後世人死して魂は泰山にあつまるといひつたへてそのつかさを泰山令といへる事ありこれ名はことなれども則天竺の閻羅王なり魏土を考ふるに沃沮国の俗その国中に赤山といへる山あつて人死すればその霊ことごとく赤山に行きて□□道のいとなみして道にて悪鬼におかされざることく咒を誦してこれを野におくるとかやこれまたもろこしの泰山なり我越の立山に地獄あつて閻国の罪人こゝに集るといふも同日の譚なりみる処近ければ其謬説も遠からずされども氣集りておとなり散じて氣にかへる物となるの間も又一氣なりたとへば水の風に逢ば波をなしさかまく時は沫をなし円器にくめば円にして方器に入ば□□なれども同じく一盤の水なるが如し沫なれば沫の用あり波なれば波の用ありといへども水なることは唯水なり唯よく此理をしる時は死後の説多しといへども皆倍慮にいてゞたのむにたらざることをしるべし体ありて痛苦をしる体なければ痛苦なし耳目あつてみきゝす耳目なければみきかす犷卒ありとも可責をほどこす処あらんや

殉死

死を以て死をうかゞふの費殉死にいたつて極る氣聚て形むすび形解ては氣散ず神識散せずして幽明のうちあまたの人間世のごとき事あるにあらず葬の礼は塗車芻虚とて車は土にしてのがれず供奉はわらにん形にて目はなともなし器皿は内に物いらざる様にすることは人

を死たりとするに忍ざれば生時のそなへとし生たりとせざれば器用に立ざる様にするなり
 中古にわら人形をかへて木人形となし目はなまで人の様になし夫より殉死もをこれりとぞ
 孔子ふかくこれをにくみたまひはじめて俑をつくるものは後なからんとたまへり生前深
 く恩顧をこふぶりしものは野辺の供相したがひて風をなし秦穆公のごとき賢君だも黄鳥の
 そしりをのこせり是みな死後を生前のごとしとおもふよりしてなり殉死の事も人情自この
 感一轍に出るゆへ北狄にも此事あり日本にも此事ありてけり土師宿禰の遠つをや土人形を
 もろこしの俑とは事ことにして人を人形にかへたりそれより久敷事□えたりしが細川頼之
 より再たび事おこりて其後学道たへ人義理にくらく感激を義とし各一命を擲ち是を忠とす
 いくばくか英雄豪傑を地下に埋けん今にいたる迄痛心流涕すべし寛文の頃幕府かたく此事
 を禁じたまふ是より天下世々その賜をうくるもの幾ばくぞや好世の徳下民にあまねくとは
 此事なるべし立花道雪高良率去の時薦野□介殉死をとゞめ宇喜田秀家率去の時老臣の諫藤
 堂高虎殉死をとふて敢死の士を得たるがごときみな豪傑の眼あり

幽霊

人死して後魂魄散ぜずさまさまの事ある由いへり伝にみえたるものは鄭の伯有晋の申生な
 り近来にては伊与矢部清兵衛の霊等分明にその跡あり□されば死後の事其霊ありと称しな
 しと称す是を有無に論ず未感応の理をしらざるなり人死して魂魄の遺る事火きえて暖気あ

り葉つきて香のこるがごとし暫く有といへども終には散じつくる也其内感激憤□して死するごときは其氣尤つよければ一団の凝氣をなして物に託し種々の変怪をなす事もさも有べしありといふものはなきにまよひなしといふものは有にふさがり感応とは是感じかれ応ずる也たとへば優人の戯場に集りて古今の盛衰をなすがごとし或義にせまり悲にのぞんでは一座の人同じく見おなじくきくといへども各応ずるものに違あれば涙をながして声にむせびひそかになきをぬすむものもありすこしきうれふるもあり何とも思はぬ人もあり是感ずるものは同じといへども応ずるもの同じからざれば感ずる事も殊なり夫より転じて悪を亡し□をやぶるに至りては一座思を改めてなきしものはわらひ眉をしばめし人はおとがひをとく是応ずるものはさきのなげきを催し応なれども感ずるもの、殊なれば応ずるもの、殊にして感応の跡殊なるがごとし生饌わらにあへばながれなめくじり塩をみればとく琥珀はちりをすい磁石は鉄をひくわら生饌をみず塩てんゆにあはず琥珀ちりをみず磁石鉄をみざる時其氣をやむるにはあらねども応ずるものなければ其氣なきがごとし磁石針にあひ琥珀ちりにあふ時始て感応の用を施す人或は穢氣のかたはらに食をはむ穢と応ずれば吐す応ぜざれば吐せずしかれば穢氣は人をして吐かしむる者といふも非なり穢氣人をして吐せしめずといふも非なり唯感応相得れば遊魂未散せざるの問題と感応をなすの間種々の変怪も有べし琥珀のちりにあひ磁石の鉄にあふがごとし冤氣いまだ散せずとも応ずるものなくは徒にやむべし故に幽冥の鬼神は感応の事にして有無の事にあらず千百万の内氣に相感応して

一だんの変怪をなすを見て世をなべてみなかくのごとしとおもふは非なりたとへば千百万のうち一異人ありといへども是を通例にはをしがたし通例は形とけ気散ず箇様の類は変といふものなりその神かしこの仏の奇瑞靈験といふは気々の感応する処魚陽の飽魚のごとし又多くは□たる内に十に六七はうそにして二三は狐狸の類或は心の迷より生ずるもの多しそれ眼は一身の精華にして森羅万象の影うつりて眼に映ずうつりて映ずるもの其神うけて接す形あるもの眼にのがれず種々の声音耳に來り感ずれば応じて其声聞接すれば声あるものは耳にのがれず唯目をやむの人は外に真の物なしといへども或は空花乱墜し或は胡蝶飛揚し耳やむものは外に其物なしといへども或波濤の音をなし或は蟬雀の声をなす是誠に花ひらけ波おどり蝶とび雀さわぐにはあらず唯耳目やむ時病のなす処なりもとひ妖怪ありとも□の目にさへぎらず□の耳にいらざして唯その者一人の目にかゝり耳にいるばかりなるは心神みだれて妄動妄見す夫夢は一身の休する処心神の接するものなければ不測の夢をなす心神みだれぬる時はいねざれども夢なり心神恍惚なる時はいかなる事をもみきくべししる時は疑なししらざる時は癡人前の夢□□むかしその人遊学してかへらす家人夢に其人死たりと夢む其さきの有さまあとの事ども残□□事甚確にして其験ありしかば家人いたみなげきけるにしばらくありて事故なくかへり來り千百万の夢のうちあふもあるべしあわざるもあるべしあひたりとて不思議にあらず下手の矢とてもあたるものなりもし衆人の耳目にさへぎり妖怪をなすものあらば是ぞ妖怪にあらずまことの妖怪なるべし狐狸の

類の人をたぶらかすもその人のみだれたるよりつけ入るものなり実験の人には決してなき事なり

葬

浮屠氏の葬に水葬埋葬火葬等有皆人情に近からずこれ体を仮とみるよりなるべしもろこしの葬は多く厚きに過いろいろの重宝を地中にうづめこれによりて乱世には盗人おこりて多く塚をあばく其うゑ雲母を以て人をうづむる時は世を経てくちずその故に体骨などを引ちらして愧をさらす是聖人のこゝろにあらず宋桓魁石郭をつくりて三年にしてならず孔子是をみて死しては速にくつるがまされるにはしかじとのたまへり本邦のごときは必重宝をしたがへず此ゆゑにたまたま暴厲の者ありて塚をあばくものなき事は内求なければなり其実を要すれば石郭よりもかたしもろこしにては土を封じて塚となす後世墓道に石碑あり壙中に誌あり土は終にくづれ平なれば世うつり時かわりて牛羊丘にのぼるの嘆あり我朝今日のごときは塔をもつて壙上におくそれ土の墓と姓名をしるす簡易なりといへども人情に適ふ珍敷馬鬣封などまふけんによきに似たりとも稀なる事なれども後來必石碑をもて墓となせば骸骨の下は又足ちりの下とちりを受けん天草の賊ほろびて後宗旨の禁いよいよ嚴なり結束して他にいづるものその宗明ならざれば□通せず店宿せず国家下を御するの大柄也いやしくも其国にむまれ其法にしたがわざるは乱民なり往々儒を□□ぶの徒是をいとふてひ

そかに己がこゝろにしたがひあらはに彼にしたがふ事なり制なきの品は時宜を斟酌して用
るも可なり制あつて制にそふかは是聖を学ぶの人にあらず傳に無其位不制礼是位なふして
礼を制するなり名教の罪人なり律令時王の制にしたがふ制なきの事は時宜を斟酌して古に
したがふべし

- 「梅園叢書」（『梅園全集上巻』、名著刊行会、二〇一〇年十月五日、二刷）所収。
- 漢字は一部を除いて新字にあらためた
- 本文中空白の部分はその字数分だけ□で埋めた。
- 六ページの○○は原文のまま。
- PDF化にはL^AT_EX_{2_ε}でタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」。 <http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/science/science11b.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>